

風と雲の便り

野殿・童仙房から……

野殿・童仙房へ…… vol.1

『風と雲の便り』創刊号をお届けします。
いにしえから、風は便りをはこび雲は便りを託されると、考えられてきたようです。他方で、便りとは縁のことで、良き機会のおとずれをも意味します。縁あって野殿・童仙房の人たちとお知り合いになりました。野殿・童仙房に風が運んできた便りを今度は、雲に託して全世界に発信していくことができれば、『風と雲の便り』はそのための使者の役目を果たしてくれることでしょう。

京都府 野殿・童仙房

京都大学大学院教育学研究科
「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

風の便り

「^{むす}結んで^{ひら}拓いて」夏季セミナーのお知らせ

来る8月9日(水)から8月11日(金)にかけて、旧野殿童仙房小学校跡地で野殿童仙房生涯学習推進委員会を主催にして下記のとおりセミナーを開催いたします。

このセミナーは、「結んで 拓いて」を合言葉に、人と人、地域と地域を結び、地域を拓いていくことを念頭におきながら、これまで生涯学習に関心を持ってきた研究者や市民有志が集まって、野殿・童仙房の区民のかたがたとともに、語りあう時間を持つことを目的としています。韓国の梨花女子大学から教員・学生も特別ゲストとしてお招きしています。また、期間中子どもたちと一緒に楽しい異文化のつどいも行います。なお、共催として、京都大学大学院教育学研究科フィールド委員会「フィールドをたちあげる」、日本社会教育学会プロジェクト研究「ローカルな知」研究会、京都生涯学習研究会が参画します。関心のある方はどうぞお出でください。詳細は追って広報いたします。

- ① 8月9日(水) 18:00～異文化のつどい：「むすんでひらいて」
- ② 8月10日(木) 14:00～18:00 研究会：「地域通貨一人を結ぶ・地域を拓く」
- ③ 8月10日(木) 20:00～公開セミナー：「地域を結ぶ・地域を拓く」

雲の便り

野殿・童仙房より

南山城村は、京都府の南の端にあり、三重県、奈良県、滋賀県に接します。京都府下、唯一の村です。南山城村の北部、標高400～500メートルの高原に、野殿区と童仙房区があります。

1982年に独立校となった野殿童仙房小学校は、児童数の減少によって、2006年3月、廃校となりました。地域のシンボルである小学校がなくなることは、まことに寂しい限りですが、今ここに京都大学大学院教育学研究科との協定によって新しい学びの場が創造されていくことは、私たち地域住民にとってこの上ない地域活性化であり、夢と希望に満ちあふれる取り組みです。様々な方々との広く深い交流が生まれることを望んでやみません。



野殿童仙房生涯学習推進委員会より

『昔子どもだったおとなと今の子どもと未来の子どものための農業体験』

イーハトーブをまねるわけではありませんが、農作業をととして学ぶプログラムは、野殿・童仙房地域にとって最も自然で、最も地域に密着した取り組みです。単なる農業体験ではなく、種まきから収穫までを通した学びは、学校教育では学べないものであり、まさに生涯学習ならではのと言えるでしょう。

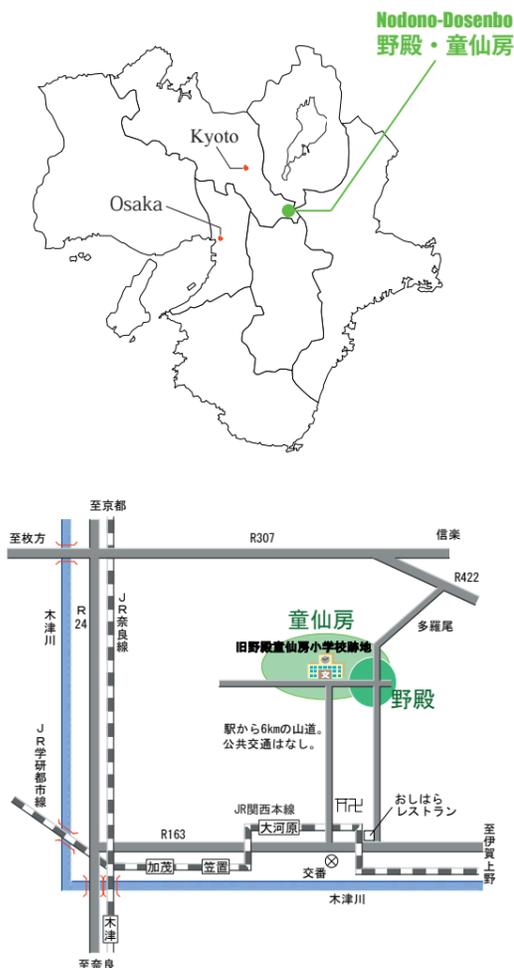
野殿童仙房地域内に確保した農地で、地域の農業従事者に教えを受けながら、地域の子どもたちが中心となり、地域外の子ども・大人もまじえて農作物を育て、収穫します。農村地帯である当地域の農業を見直すとともに、他地域の人たちとの交流を設定し、子どもたちの視線で未来の地域づくりを構想します。

2006年8月の開始を予定しています。参加要項、日程など、詳しくはWeb(<http://souraku.net/manabi/>)をご覧ください。

今後のお知らせ、詳細などは <http://souraku.net/manabi/>

京都大学問い合わせ先：「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「フィールド委員会」柴本まで
〒606-8501 京都市左京区吉田本町京都大学大学院教育学研究科
TEL:075-753-3030

野殿・童仙房問い合わせ先：野殿童仙房生涯学習推進委員会
〒619-1401 京都府相楽郡南山城村大字童仙房小字三郷田199番地2
会長 中村富士雄／副会長 西村秀俊



2006年7月31日発行
発行：京都大学大学院教育学研究科「フィールド委員会」
プロジェクト「フィールドを立ち上げる」
編集：前平泰志
制作：(株)松籟社

野殿童仙房生涯学習推進委員会 発足調印式

2006年3月、統合によって廃校となる野殿童仙房小学校の跡地利用を模索するなかで住民が京都大学前平研究室へ相談におもむいたことから、両者の交流が始まりました。そのころ同研究科では、文部科学省による「魅力ある大学院教育」イニシアティブの採択によって、フィールドを探していたこともあって双方の思いが一致し、3月2-3日、前平研究室の教員や学生らが、童仙房において区役員と初会合を行いました。4月より野殿区・童仙房区が自主的な取り組みとして、京都大学と連携していく形を検討し、4月29日、同研究科が、小学校跡地で地域住民との寄り合いを持ち、野殿童仙房生涯学習推進委員会を発足しました。その結果、6月23日に旧野殿童仙房小学校体育館にて調印式をむかえる運びとなりました。

協定書

京都大学大学院教育学研究科と京都府相楽郡南山城村野殿区、童仙房区は、生涯学習の理論と実践の発展に寄与することを目的に、平成18年6月23日から平成19年3月31日まで、野殿童仙房小学校跡地および野殿童仙房保育園跡地を拠点として活用し、共同で任に当たる。この主体を野殿童仙房生涯学習推進委員会として組織する。

平成18年6月23日

教育学研究科長 川崎良孝
野殿区長 中村富士雄
童仙房区長 西村秀俊

新しい教育空間の創出に向けて

京都大学大学院教育学研究科長 川崎良孝 Yoshitaka KAWASAKI

6月23日、野殿・童仙房区と京都大学大学院教育学研究科は、幼児から高齢者までの生涯学習の理論と実践の発展に寄与することを目的に、生涯学習推進委員会の発足調印式を行い、正式に協定を結びました。

「京都大学の基本理念」前文は、「京都大学は、……多面的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定める」となっています。「多面的な課題の解決」に関して、現在の日本は都市／田舎、高齢化／少子化、人口集中／過疎、第三・四次産業／農業、公的部門／私的部門、情報富者／貧者、勝ち組／負け組など、対立として把握される現象が噴出しています。こうした課題に理論と実践面での向き合い、融合という観点から取り組む必要があります。また「地球社会の調和ある共存」となっています。これは重要なことで、単に「人間の調和ある共存」ではな



京都大学教育学研究科長、童仙房区長、野殿区長による調印

く、環境全体を含めた調和ある共存ということなのです。こうした「京都大学の基本理念」からすれば、新たな教育空間の創出という目的で、魅力あるフィールドを住民のみなさんとの対等な関係の中で活用させていただけることを、教育学研究科は感謝しています。

今回の協定は第一歩にすぎません。教育学研究科は、野殿童仙房小学校および保育園跡地を拠点として、双方が対等のパートナーとして、魅力ある教育空間の創出、持続、深化、発展のために努力したいと考えています。

(2006年6月23日調印式挨拶より)



野殿太鼓の演奏

闇に触れる

前平泰志 Yasushi MAEHIRA 京都大学大学院教育学研究科教授

かたくなに何を 拒んできたのだろう
闇におびえて泣いたのは 遠い昔のことなのに
「やわらかい月」作詞 作曲 編曲 山崎将義

野殿・童仙房には、都会では手に入れることのできないたくさんのお宝がある。そのひとつが闇である——このように言うと、驚く人もいるに違いない。

子ども時代、暗闇が怖かった……こんな記憶を持っている大人は少なくないだろう。いや、今でも暗闇は苦手と思っている大人はたくさんいるかもしれない。田舎で暮らしたくない理由のひとつに、「闇が怖いから」とこたえる大人がいるくらいだから。

都市のなかでは夜の暗さを感じるのは難しい。繁華街を歩きまわらなくとも、至るところに街灯があり、ネオンサインがある。日中より明るいじゃないかと思うほど、こうこうと光り輝いているのが都市の夜だ。

考えてみれば、〈暗黒〉時代や〈暗黒〉大陸という言い方を引き合いに出すまでもなく、闇とは、無知と蒙昧のシンボルだった。私たちは、闇は、思慮や分別の対極にあるもの、光を照ら

して一掃すべきものと、長い間信じこまされてきた。それ以来、夜は昼の植民地として支配され、浸食され続けてきた。世界中がごぞつて夜の闇を撲滅するために、光の文化の方になだれこんでいった。「自覚めよ、諸君！」というわけである。だが、本当にそうなのだろうか。光には光の、闇には闇の、秘められた美しさや効用があるのではないだろうか。

闇がなければ光の本当の美しさがわからない。月の光や星の光は、周囲が闇であればあるほどその美しさが際立つ。また、暗闇は視覚に頼れない分だけ、他の感覚を研ぎすますチャンスをも与えてくれる。虫の声や川のせせらぎの音、新茶の香り、木々の匂い、風の冷たさ、土の感触…それらは四季の訪れを知らせてくれたり、生きていることの不思議と喜びを教えてくれることだろう。

生涯学習は、知識という外部からの光によって世界の蒙を啓こうとする実践ではない。むしろ、闇が闇のままに固有の存在価値を持っていることを再認識する文化運動である。

目を閉じてみよう。暗闇のなかでしかわからない秘められた宝物をきっとみつけることができるはずだから。

都市のなかで生きる 私の異文化体験から

金智鉉 Ji Hyun KIM 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程

現在私は韓国人留学生として京都に住んでいる。留学前はソウルに住んでいたため、都市の生活しか経験したことがない。確かに、都市というところは、いろいろな面で便利な部分がある。しかしその環境は人びとにとって、どれほどやさしいのだろうか？ 特に障害者や高齢の方にとって、そこはいろんな危険要素が潜んでいる、危ない環境なのである。そのような人たちが都市のなかで生きること、人びとのなかに些細な誤解が生まれたりする。また、人の援助なしではものごとがうまく進まないといったことも、都市ではありがちなことである。とはいっても、都市のなかで、身体の不自由な方を健常者が介助している姿をみかけることもある。しかし重要なのは、介助することにもまして、危険要素あるいは障害要素をなくすことなのではないだろうか。「障害者や高齢者にとってやさしい環境・社

会」とは、「みんなにとってやさしい環境・社会」であるのだから。

童仙房には、“高麗寺”という韓国のお寺があり、野殿童仙房小学校の閉校前は韓国の子どもたちとの交流があったことなど、異文化要素がすでに存在している。この異文化要素に私が親しみを感じるのは、私にとっての母国の文化が日本の童仙房という異文化の地のなかに再発見されるからなのだろう。今後、旧野殿童仙房小学校の跡地を生涯学習のフィールドとして活用していくにおいては、いろいろな人びとが関わり異文化要素も増えていくであろう。その際にこの場所が、先に述べた、障害者や高齢者はもちろんのこと、異文化を運んでくれる人に対しても、「みんなにとってやさしい」場所・環境となることを、心から願っている。

(2006年6月23日調印式でのお話より)